
超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生

トマト畑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生

【Nコード】

N5219Z

【作者名】

トマト畑

【あらすじ】

かつてゲームギョウ界の平和を守ったシルバーハートのユウ。今現在ニート化した妹達の為にいろいろと働いていた。そんなユウの前に次元神を名乗る者が現れる。もう一つのゲームギョウ界を救ってほしいと。ユウは旅立つ。新たな姿となって…。

『今の私は女神候補生のシルバーシスターです！』

女神候補生シルバーシスターが今世界を救う為に旅立つ。

第0話 男の娘な女神様（前書き）

はじめましてとお久しぶりの皆さんトマト畑です。あの衝撃のラス
トからの続編です。

これは原作キャラが最早別のキャラへと変貌したかの如くキャラ崩
壊しているのでそう言うのが嫌いな人は回れ右でお願いします。

第0話 男の娘な女神様

さて皆さんお早う。こんにちは。そして今晚わ。

唐突で申し訳ありませんが私の名前はシルバーハート人間の時の名前はユウと申します。この世界、ゲームギョウ界を守護する女神の一人です。一応四人の女神の兄をさせてもらっています。兄？姉じゃないのか？残念ですが私はいいや俺はこう見えても男の子「いいえ男の娘」なんです。ん？今何か雑音が入った様な？

まあいいか。とりあえず今から妹達の朝ごはんを作らないといけないので失礼しますね。あー忙しい。

第0話『男の娘な女神様』

俺シルバーハート事ユウの一日は朝妹四人を起こしてご飯を食べさせる事から始まります。

「お兄様、私前から気になっていた事があるんだ。」

「……なに？」

「お兄様は胸が大きい娘と小さい娘どっちが好き？」

朝からいきなり問題発言をしてきたこの娘はネプテューヌ。女神化した時の名前はパールハート。女神化前と女神化後で性格がまったく違うのが特徴である。そして別名『年中発情女神』である。

「……ネプテューヌ貴女やっぱり馬鹿ね。お兄様はつるぺた口りな胸が好きに決まっているでしょう。具体的には私の胸が好きなのよ。」

「このネプテューヌを馬鹿にした他の女神達より一回り小さい女の子はブラン。女神化した時の名前はホワイトハート。キレると口調が荒くなる困った娘でもある。そして別名『愛すべき馬鹿』である。」

「朝から馬鹿馬鹿しい会話しないでくれるかしらせつかくのお兄様の朝ごはんが不味くなってしまっわ。それにお兄様は胸なんかで女性を選んだりしないわ。だっってお兄様はこの私を愛してくれているのだから。」

「まあ愛してはいるけどあくまでも兄妹としてね。」

「わかっているわお兄様。兄妹としての禁断の関係を私と望んでいるのは。でも焦ったらだめよお兄様。私はじめてはコスプレして自宅でっ決めてるのよ。」

「こいつは駄目だな。」

この何事もないように危険極まりない発言をしまくっているのはノワール。女神化した時の名前はブラックハート。別名『ムッツリスケベ』。

「今私の中にお兄様が作った食事が食道を介して胃に落ちていくのがわかりますわ。だけどその食事の中には媚薬が入っていて私を発情させたお兄様そして私をきゃー!!!」

「もっと危険なのがここにいたよ。」

この悶えているのはベール。女神化した時の名前はグリーンハート。またの名を『歩く妄想発生器』。

「因みにユウは限界お兄ちゃんなんていう別名が存在します。」

「イストワール俺の別名は内緒にしておくようにっていったよね？」

今俺の別名を暴露したのは合法ロリ事史書イストワール。ただの変態である。

「ちなみにユウの好きな胸は揉みごたえのある胸です。」

「『『『よし、勝った！！』』』』」

勢いよく立ち上がりガッツポーズをとる妹達。

「いやいや待ちなさいよ。あんた達お兄様今私の胸が好きって言ったわよね。」

「いや言っていないし。どう見てもイストワールがいったよね？」

「てめえ言わせておけばいい気になりやがって！！お兄様はな、ちっちゃい女の子が好きでたまらない変態なんだよ！！！！」

互いの襟首を握りしめてにらみ合う二人。どこのヤンキーだよ。

「いや、ちょっと待てブラン。俺はロリコンではないから！！」

「良い度胸ですわね。新妻の前で人の旦那を奪おうとするなんてこの泥棒猫達！！」

「お前の妄想の中では一体俺はどうなっているのかなベルさん。」

何故か両手に箸を持って構えるベール。何やっても絵になるなこの妄想発生器は。妬ましい。

「お兄様私納豆嫌いだから残していいかな？」

器に入った納豆を俺の前に突きだすネプテューヌ。

「食べないと立派な女神になれないよネプテューヌ。」

「ならなくてもいいもん。お兄様に永久就職するから。」

「なら間接的にこいつらに叔母さん呼ばわりされる事になるよ。」

「それでも私はお兄様がほしい!!!」

「ネプテューヌ又貴女お兄様に愛の告白だなんて!!!」

「良い度胸してんじゃねえかよ!!!」

「今日という今日は決着をつけてあげますわ。」

最早手が付けられない妹達。だが俺にはそんなこいつらを黙らせる魔法の言葉がある。

「お前達もしも喧嘩したらおやつ抜き。」

「「「「!?!?」「」「」

「それは酷ではないですかユウ？」

「いや別におやつ位なら別にいいんじゃないかな？」

「あれを見てもそう言えますか？」

「ごめんなさいお兄様。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

虚ろな目で誰もいない空間に謝り続けるネプテューヌ。

「お願い許してお兄様。何でもしますから許してください。」

膝を付きこちらを涙目で見つめるノワール。手は常に十字を切っていた。

「もう妄想なんてしませんからどうかおやつ抜きだけはお許しくださいお兄様。」

妄想がなくなったらお前に何が残る？

「うつつ、ぐすつつわああああああん！！お兄様の馬鹿あ！口リコン！チビ！サディスト！シスコン！」

それ以上言ったら怒るよ。

「どうですか？」

「何とかしてイストワール。」

「しょうがないですね。皆さんここにユウがベッドの下隠していた

雑誌があります！！その名も『巫女大全集』！！」

イストワールが掲げた雑誌。あれは月に一度販売される巫女好きの
為の巫女好きによる雑誌。定価680円。

「馬鹿な完璧に隠していたはずなのに！！」

ベッドの下に張り付けて光学迷彩で見えなくしていたというのに…
…。

「まさかお兄様があんな低俗な雑誌を見るなんて……いやこれは違
うわ……。これはお兄様のサイン。」

巫女さんのコスプレをしてほしいという遠回しの願い！！」

「巫女服なんてあったかなあ？」

「いや寧ろここは全裸で攻めるべきですわね。」

「馬鹿ね。巫女服はある程度着崩す位がちょうどいいのよ。神聖な
巫女がエロを醸し出す。まさにギャップ萌えよ。」

「とりあえず今の内に逃げよう。」

「それでユウ。この本はどういう事ですか？」

残念俺は逃げられなかった。イストワールによって行く手を阻まれ
てしまった。

「そうねお兄様私達の誰かにカテゴライズされているならまだ我慢
もできるわ。」

「でもこの中に、いいえ。」

「ゲームギョウ界の主要キャラの中でも巫女なんていないよね。」

「……これはお仕置きね。イストワールライターを出しなさい。」

「どうぞ。」

「待てよ。お前等何をするつもりだ!？」

「何をつて……。」

「」「」「燃やす。」「」「」

「やめろおおおおおおおおおおお!!」

無情にも燃え尽きる我が巫女さん達。

これは俺の黒歴史の一つである。

朝ごはんと巫女さん達の火炙りが済んだ俺は食器を洗い、洗濯物を洗濯機にかける。

そして居間に掃除機をかけようとした時であった。

「やあユウ君せいが出るね。それとお煎餅頂いているよ。」

掃除機の進行方向にノンビリとソファーに腰かけた5pb・ちゃん
がいた。ちなみに彼女が食べてやがる煎餅は俺がストックしていた
物である。

「5pb・ちゃん一体どうやっていつもいつも天界に現れるの？」

「ロッククライミングとっておくよ。」

5pb・ちゃん。ゲームギョウ界のストリートミュージシャン。その歌は世界を震わせ地震を起こす。そしてその歌は人々の理性の枷を外してしまう。さらにその歌は地殻変動を……とりあえず彼女は凄い奴。普通の人間が天界に辿り着く事はあり得ないと言っておきましょう。

「聞くだけ無駄か。悪いんだけどそこ退いてくれるかな？掃除機がかけられない。」

「いいけどボクの下着の色をあてたらね。」

「お前何言ってるの！？」

「当てられなかったらボクの全力を持ってユウ君の全てを奪いとるよ。」

「……………じゃあ青。」

「流石だね。正解。約束通りボクは脱ぐよ。」

「お前いい加減にしろよ！！」

「大丈夫だよ。ボクの全力をもってユウ君をへブンさせてあげるよ。」

「言っている事の殆どが理解できないんだけど…。5pb・ちゃん
の存在自体が俺の存亡を揺るがしているからね。」

「こうなれば力強くでー!!」

「何で俺が脱がされなきゃいけないの!? っていつか離してよ!」

何故か5pb・ちゃんによって脱がされようとしている俺。だが俺
も女神の一人だそう簡単に脱がされたりなんてしない!!

「……あり得ないわ。」

そしてその光景をポテチをかじって闊歩していたノワールに見られ
てしまった。これすなわちさらなる火種なり。

「あり得ないわー!!」

走り去るノワール。縮まる俺の寿命。加速する時。崩壊フラグが乱
立の天界。

「までノワールお前今重大なる間違えを!!」

「行っちゃったね。パリン。」

「まだ洗濯物だって干してないのに。」
何どうでもよさそうに煎餅食ってやがるこのアイドルは……!! お前
が変わりに洗濯してくれるのか!?

「そんな泣きそうな顔しないでよ。……しかたないね、ここはボクがあのお女神様を足止めしておくから買い物にでも行ってきたら？」

「倒してもかまわないからね。」

「ボクに死亡フラグは効かないよ。言葉通りに受け取らせてもらうよ。」

「よし、それならちょうどプラネテューヌのスーパーがお昼のタイムサービスの時間だったけ。よし安いのいっぱい買っぞ！」

「ユウ君は絶対良いお嫁さんになるよね。パリン。」

俺は男だ。そして妹達が自立してくれるまでは結婚なんて出来るわけがない。

タイムサービス。それは主婦及び主夫達の戦場。

タイムサービスそれは普段では手に入らない高嶺の品物を安くで手に入れる事ができる庶民の味方。タイムサービスそしてそれは家族の笑顔の為に闘う物達が集まる聖地。

「なんていう気迫だ。やはり卵パック50円の効果はすさまじいんだね。」

「あらユウちゃんじゃない。」

「あらほんと。女神様もタイムサービスは見逃せなかったのかしら？」

「家族が家で待つてますから。」

「本当にいい娘ね家の息子の嫁に欲しいわね。」

「そんな事したら息子さん蒸発しますよ。文字通り。」

「それにユウちゃんは私の嫁だよ。」

「REDちゃん？こんなところで何やってるの？」

タイムサービスでよく会うおばさんAさんとBさんと会話をしているとロイヤルエンペラードラゴンのREDちゃんがこのスーパーの制服を着て現れる。

「あ、私ここでバイトしてるんだ。正確にはこのスーパーの助っ人だよ。最近売り上げが減っているから助けてくれと言われてね。」

ロイヤルエンペラードラゴン事REDちゃんはどんなに経営状況が悪いスーパーマーケットでも3日もあれば立て直してしまう凄いロイヤルエンペラードラゴンなのである。

「通りで最近ここのお客が増えているわけか。」

「ユウちゃんはお買い物？」

「タイムサービスがあるらしいからね。」

「あ、あれに参加するなんてユウちゃんはチャレンジャーだね。ロイヤルエンペラードラゴンの私でもあれに参加するのは無理だよ。」

「まあ毎回怪我人続出だもんね。」

「じゃあ私は仕事に戻るよ。がんばってねユウちゃん。」

「うんわかった。さあ振り切るぜ。」

俺はREDちゃんの声援を背に零刹那を鞘にしまった状態で構える。

『お待たせしました。これより毎度お馴染みのタイムサービスを開始します。さあ主婦よ主夫達よ闘わなければ生き残れない!!!』

「始まったか。絶望（品切れ）がお前達のゴールだああああああああ!!!」

その後俺は阿修羅さえも凌駕する主婦及び主夫達を切り払い、殴り飛ばしてお一人様3パックまでの卵を3パックちようど手に入れてレジに並ぼうとしていた。その時Sギア（銀色の折り畳み式の携帯電話）が誰かから着信を伝える為に着うたを奏でる。

「はい、もしもし。」

『やあボクだよ。』

「……………誰？」

『君が愛してやまない人だよ。』

「霊 さん!？」

ど、どどどじよう。緊張してきたよ。お賽銭あげなくてはいけないのかな？

『その通り5pb・ちゃんだよ。』

「……………間違い電話です。」

『ごめんごめん。それより今どこにいるの？』

「……………プラネテューヌのスーパー『戦場』だけど。」

『悪いんだけどついでお菓子買ってきてもらっていいかな？』

「確か一週間分は買い込んでいたはずなんだけど？」

『女神様相手にしたからちょっとお腹が空いてね。悪いんだけどよろしくね。』

「まさか…！？」

『ちょっと危なかったけど全員倒しておいたから。』

『……………ブランが負けたんじゃないホワイトハートがまけたの。』

ブランの意味不明な発言を聞かされた瞬間に俺は通話をやめました。

「……………とりあえず帰るか。お菓子買ったら赤字決定だよ。またバイトしないといけないかな？」

スーパーで買い物を終えた俺はスーパーより徒歩三分の公園のベンチでぼーっと座っていた。

「花火か。買って帰ったら天界は大火事決定だよな。」

公園より見える高層ビルには株式会社花火と爆発の『日本一』と書いていた。

ネプテューヌ達が花火をすると必ず火事になるからいやなんだよね。

「がすがす。」

ふと買った品物を入れてあったレジ袋がガサガサと動いた為に見るとそこにはレジ袋に顔をつっこんでいる。ホームレス（ガスト）がいた。

「……ちよつと待てよ。」

「がすがす。お久しぶりですのお師匠。がすがす。」

この人はホームレス（ガスト）この公園に食べ物を持って訪れると90%の確率で現れる厄介極まりない存在である。以前食べられる野草を教えて以降師匠と呼ばれる様になってしまった。

「誰が師匠だ！？そして何勝手に人様のお菓子食べてやがる。ほらやめなさい。」

「やめるから金寄せせよですの。」

「お前本当に何言ってるの!？」

「世の中金ですの。師匠と金は切っても離せないですの。」

「お前は一回自給自足の暮らしを経験してみる。とりあえずこれで菓子でも買いなさい。」

「話がわかるですの師匠。」

俺が500クレジットを渡すと颯爽と消えていった。彼女にも良い就職先を見つけてあげないと駄目なのだろうか？

「最近ゲームギョウ界の平和が保たれているのは良い事なんだけど少し暇すぎるのがネックなんだよねー。」

ベンチに腰を掛けて公園で羽休みをしていた黒龍に先ほどスーパーで買ったパンを千切って与えてながらこれからのゲームギョウ界について考えていた。

すると公園の端に白をモチーフとした献血車が佇んでいる事に気付く。あまり人は集まっていないようである。

「献血をお願いしますー。」

白い看護服に身を包む一人の少女。名前は確か…。

「あれはコンパさん相変わらずがんばっているなあ。」

コンパさんはよくネプテューヌと一緒に遊んでいた三人組の一人である。ネプテューヌともう一人、アイエフさんに色々引っ張り回

されて巻き込まれていたなあ。

「そう言えばアイエフさんはリンボックスで家電製品を販売する大型電気店の店長だっけ。かつての悪ガキ三人組もそれぞれの道を進みだしたか。早くネプテューヌにも就活させないとね。」

何やら懐かしさを感じながらも俺は公園を後にして天界へと転移した。

「ただいまー。今帰ったよー。……何この惨状。」

現在の天界の惨状は半分が瓦礫の山。いやもう瓦礫の山。至るところに火の手が回っている始末。

「申し訳ありませんお兄様。5pb.さんが花火を持ってきてくれたものですから。つい……。」

あちこちが黒く煤けているボールが頭をアフロヘアにして俺の前に土下座。

「わ、私は止めたわよ。」

全身でブラックハートを体現しているノワール。彼女も同様にアフロヘアで土下座

「…貴女が一番フィーバーしていたじゃない。」

ホワイトなんて似つかわしくない状態のブラン。

「お前達…!!」

「ねぶ!? お兄様どうして女神化するの!?!」

ちなみにネプテューヌは何故か無傷だった。

「言わないとわからないか?」

「「「「ごめんなさいいいいいいいいい!!!!」」」」

「許すわけないだろうがあああああああああ!!!!」

その後妹達にお仕置きをした。そして半分程炎上していた天界を再生させるとついでに半分程燃え尽きていたイストワールを再生させた。

「なんで一日でこんなに疲れないといけないんだよ。」

「それがお兄様だからよ。」

「それで納得できる自分が嫌だ。」

お昼からすき焼きという贅沢をしながら俺は自分の運のなさをなげいていました。

「おい! ネプテューヌてめえそれは私の肉だ返しやがれえええええええ!!!!」

「全ての肉は私の物なのだよ。っていつか私お野菜食べられないんだよね。」

「それならこのお野菜達をお兄様だと想って食べればいいのですわ。」

この椎茸はお兄様。ああお兄様が私の中にいいいいいいいい！……！

「やめろ。品位が疑われる。」

「やだあ。お兄様のお肉が私の中に……。これ、凄いよ。」

「お前もやるなよ！やるならせめて野菜でやれよ。」

「野菜なんて草だよー。そのせいか口の中が口内炎だらけなんだよね。」

「謝れ農家の人達に謝れよ！そして口内炎はビタミン不足だよ！！」

「ボクは野菜も食べれるよ。」

「お願いだから気配もなく現れるのは止めてくれるさぽぽ。ちゃん？」

いつからいたのかさぽぽ。ちゃんは俺の隣でもの凄いスピードで箸を動かして肉達を捕縛していた。

「それはボクに音楽を止めると言つのと一緒だからね。」

「何でもいいけどこの野菜食べてよ。」

「別にいいよ。」

「家の妹を甘やかさないでくれるかな？」

「パープルハート様食べないともぐよ。」

「うわぁこの白菜美味しそう。いただきます（棒読み）。」

「随分素直だけど一体俺がない間に何があつた？」

「お兄様にとって巫女服が目の前で引き裂かれるような事をされたのよ。」

「よくお前等生きていたな。」

「そう思うならお兄様が大事にキープしているお肉を頂戴。」

「ひとときだけだからな。」

「……愛してるわお兄様。」

「待てよブラン何で肉を全部持っていく!?!」

「ならお兄様私のお肉をどうぞ。」

「ありがとうべール。はむはむ。」

「私のお肉がお兄様の中にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!私お兄様に食べられちゃいますわー!!--」

「……それでrpbちゃんいつまでいるの?」

「すき焼き食べきるまで。」

「……お兄様お肉がない。」

「10人前は入れていた筈なのに…。」

「私まだ3きれしか食べられてないわ。」

「俺は2きれ。」

「流石に肉はもうないから締めうどん投入だぁあ!!！」

「「「「「やふううううううう!!」「「「「「

締めのうどんはすき焼きの醍醐味なのである。

この世界、こいつ等の事は嫌いではない。だけど…やっぱり思ってしまう。自由に生きてみたいと。そしてそんな思いがあんな事になっってしまうなんて今の俺には予想もしてはいませんでした。

次回予告

ユウの前に立つ世界全ての悪アンリマユ。そしてダークネスハート。それを倒す為にユウは再び罪を背負う。

次回 超次元ゲームネプテューヌmk2男の娘だった女神候補生

プロローグ『幼女にはもはや危機感しか感じ得ない』

騙されたなら騙し返せ。

テ ルズ風スキット
一人ぼっち

いーすん「皆さん好き焼き美味しそうですね。でも誰か重要な人物の事を忘れていませんか？ユウによって修理された私は何故か鎖でぐるぐるに巻かれて放置されてしまいました。誰か教えてくれませんか？私は何か悪い事をしたのでしょうか？私はただユウのスパッツをかぶっていただけなのに。」

第0話 男の娘な女神様（後書き）

これはシルバーハートの存在を知らない人への説明的なものでした。

プロローグ 『少女には最早危機感しか感じ得ない』（前書き）

ここからシルバーハートの物語は終わりシルバーシスターの物語が始まります

プロローグ 『少女には最早危機感しか感じ得ない』

シルバーバートside

今俺の立っている場所。そこはまるで地獄であった。

いや地獄その物であった。辺りに見えるのは大量に積み重なった死体。辺りにたち込めるのは死体から漂う腐敗臭のみ。地は枯れはて空は血のような赤へと染まる。

生命の息吹きがまったく感じられない場所で俺は対峙していた。全ての歪みとも言える存在ダークネスバートと……。

「信じていたわシルバーバート。最期に闘うのは私と貴方であると。」

「ダークネスバートお前はここで倒す。そして全ての人々の想いと共に俺は闘う。」

「ふふふっ、あはははははは！！よく言えるわね自らの最愛の妹達を殺しておいて……！」

「確かに俺は自らの過ちに気付く事ができずに妹達を手にかけてしまった。だけど俺は絶望しない。諦めない。このバトルファイトの勝者となって俺は妹達の想いを、志し半ばで散って言った者達の願いを叶えてみせる。」

「いいわ、貴方に決定的な敗北を与えてその愚かな希望も打ち砕いてあげるわ。」

！全ての悪意を私に集まれそしてシルバーハートの希望を打ち砕け
！！ダークインパルス！！」

ダークネスハートが両手に握られた槍を一つに連結させて投擲の構えをする。

今世界の罪と世界の絶望がぶつかるそして……………。

「良かったわねシルバーハートこれでこのバトルファイトの勝利者は貴方よ。」

「どうして抵抗しなかった!？」

ダークネスハートは槍を投擲はしなかったそれどころか俺の一撃を受けて身体が二つに別れている始末。

「バトルファイトの勝利者には特典が与えられるのよ。勝利者は次のバトルファイトで奏者の資格を得る事が出来る。」

「次のバトルファイトだと!?!?どういう事だ!!バトルファイトは終わったんじゃないのか!？」

「バトルファイトは繰り返し返される。そして奏者の資格を得た者は全ての記憶を消されて新たな役割を与えられる。私の目的は貴方を奏者にする事だったの。ふふふっ、貴方は最初から私の手の平で踊らされていたのよ!!!」

「詳しい説明を……………!??」

俺は七つの大罪によって喰らいつくされた身体を引きづりながらも上半身と下半身が二つに別れたダークネスハートに詰め寄ろうとするが自らの身体が光の粒子となっていくのに驚き足を止める。

「これはまさか本当に……………」。

「さよならシルバーハートまた会いましょうね。そしてまた愛し（殺し）合いましょうね……………」。

その言葉と共にダークネスハートは息絶える。だが俺にはそんな事を気にしている余裕はなかった。自らの消えていく身体を見ながら戸惑いを隠せずにかつての守護女神の面影はなく、そこには自分のこれからがいつたいたいどうなってしまうのか不安一色にその身を染めた一人の男の娘だけがいた。

「俺はもう思い出せないのかゲームギョウ界のみんなの事を……………そんなの嫌だ。誰か何か言ってくれよ。」

次第に俺の目には涙が溜まっていく、そして……………。

「……………」興奮してきましたー！！……………」

突如そこからへんに転がっていた全ての死体が起き上がり謎の叫び声をあげる。

「はい？」

俺はその光景に頭の中で疑問の嵐が吹き荒れる。いつの間にもやらの身体が粒子化も止まっていた。

そして死体達がもの凄い勢いで俺に向かってくる。

「「「「悪夢にうなされるシルバーハートちゃん可愛いよー!!」
「「「「」

そして群がってくる死体達そしてその恐怖に俺は絶叫する。

「いやああああ!!」

夢から覚めたユウside

「やっぱり夢オチですか……。」

そう今まで見ていた光景は夢。誰が何と言おうと夢。騙されたなら騙しかえせ。

「それにしても我ながら意味不明な夢であったよパトラ シュ。ダークネスハートって何?しかもネプテューヌ達は死んだのか。」

イストワールよお前は一体俺にその身を持って何を教えてくれたんだ?それにしてもsinシルバーハートかぁ語呂が悪すぎるう。……ヤバイ俺自分の夢にまで突っ込み入ってるよ。それにしても嫌な汗をかいたとりあえずシャワーでも浴び………なんでさ。」

シャワーを浴びようとベッドから起きた俺の視界に現実を疑う様な光景が飛び込んでくる。

「世界がぴ、ピンク色になっているだと……………！？」

俺は昨日確かに自分の部屋で眠りについた筈なのだがいつの間にもピンク色の夜に迷いこんだのだろうか？

辺りを見渡してみてもただピンク色の空間しかなくいつの間にか先程まで寝ていたベッドまで消失していた。

「これは初めてのパターンだな。さすがの俺も戸惑いをかくせない。

」

「あの一。」

不意に俺の服の端が引つ張られる感触と共に女の子が聞こえてくる。直ぐ様振り返った俺ではあったがその事を後悔したのは言うまでもない。

「は、初めまして私貴方の、超次元アイドルシルバーハートちゃんのファンなんです！」

そこにはの博 神社の巫女さんとまったく同じ恰好をした10歳前後の女の子が幼女がいた。髪の毛は白くて腰まで伸ばしている超ロングヘア、瞳は青……………あれ？こんな人何処かみたような。

「あ、わかりますか？これシルバーハートちゃんの真似をして髪の毛は染めて眼球は取り換えてみました。自分では結構イケテると思うんですけど？」

そうだ俺だ！俺に似ていたんだ！

アイドルの真似をしてそういう事をするファンがいると5pb.ちゃんから聞いてはいたけどまさか自分がされる日がくるとは……………。

「ところでシルバーハートちゃんにお願いがあるんです！」

「ん？何かな？俺に叶えられる事だったらいんだけど。」

「私を抱いてください。」

その言葉を聞いた瞬間俺は反射的に逃げようと試みる。
だが残念少女に手を掴まれた。

「だ、駄目ですか？」

「流石に初対面の女の子にそんな事は出来ないよ。」

「うう、シルバーハートちゃんはファンの女の子を抱くのが趣味だ
って聞いてたのに！」

とりあえずその間違えた情報を君に教えた人物を教えてもらいたい。
とりあえず生きていた事を後悔させたいので。

「ならサインください。」

まあそれくらいなら。

俺は少女にペンを手渡される。色紙かなにかないのだろうか？

「とりあえず何処に書けばいいんだ？」

「背中にお願います。超次元アイドルシルバーハートちゃんよりおーちゃんへって書いてもらっていいですか？」

「か、構わないけど。」

俺は背中を向けた幼女の巫女服の背に言われた通りにサインを書く。

「これでいい？」

「はい、ありがとうございます！帰ったらゼウスちゃんに自慢しちゃおうー！」

友達に最高神がいるのか！？いやきつと名前が一緒なだけであろう。そう信じたい。

「と、ところでこのピンク色の空間は君が何かしたのかな？出来れば元に戻してほしいんだけど。」

「構いませんよ。」

構わないのか！？意外とあっさりだった。

「でもその前にアンケートを取らせてもらってもいいでしょうか？」

幼女は何処からともなく紙とペンを取り出す。

アンケート、まさか詐欺か紛いのものではないだろうか？

だが幼女はそんな事に気にも止めずアンケートを開始する。

「まず問1男の子と女の子どちらが好きですか？」

「まあ普通に女の子が好きだけ。」

確かに俺の顔はこれだけ変な趣味はないからね。

「では問2貴方はゲームの二周目でレベルと見た目引き継ぐとしたらどちらですか？」

「見た目かな？」

いくら二週目でも最初から強いつていうのはあまり好きではないんだよね。

「問3です。闘いには頼れる相棒は欠かせませんか？」

「出来ればほしい。」

アドバイスとかしてくれるパートナーがいてくれるとありがたいよね。イストワール？あれはただの変態。

「問4です。好きな女性のタイプは？」

「料理が得意な家庭的な普通の女の子がいいかな？」

「そ、そんな私まだ結婚なんて考えていませんよ。まずは交換日記

から始めましょう?」
決して君の事ではない。

「問5これが最後です。家族の絆は例え世界が違ってても断ち切れないと貴方は言えますか?」

「勿論だ。絆とは決して断ち切」これでアンケートは終わりです。
最後まで言わせて!!」

「ではここに名前を書いてください。」
俺は幼女に言われてアンケートの右下にあった名前を記入する欄に名前を書く。普段の俺であったなら書く前に何か違法な事がないか確認するのだがこの時は面倒事から早く開放されたいが為にそんな事は気にしてはいなかった。

「これで終わり?」

「はい。これでシルバーハートちゃんの別世界への移送が決まりました!!」

「What?」

「綺麗な発音ですね!!」

「ありがとう、じゃなくて君今何て言った?」

「それでは別世界に行くにおいて変更された貴方の情報をお知らせしますね。」

駄目だこいつ人の話を聞いてない。別世界に移送とか俺の身体がこの幼女はヤバイと警報を鳴らしている。とりあえずこの空間から脱出しなくては。

「まず貴方の希望通りに力の受け継ぎはせずに、移送する世界に合わせて貴方の力を削減します。」

「な、何を言っ……………!？」

幼女に文句を言おうとするが身体から急激に魔力が消費、いやこれは抜き取られている目の前の幼女に。それと同様に俺の身体から力が抜けて膝を付く。

「それとこの武器は全て預かりますね。」

「な!?!いつの間に!?!」

幼女の手にはいつの間にか俺の身体の中に取り込んでいるセブンスード（魔剣）の全てがあった。

「でもシルバーハートちゃんの武器はやっぱり双剣ですよ。菊彦紋字と零刹那はお返しします。但しこの二つからも力は全て抜き取らせてもらいます。無論連結して使用しても童子切りにはなりません。ただの剣と成り果てています。」

この幼女まさか剣自体から力を抜き取るつつているのか!?!そんな事が出来るなど普通ではない。いや幼女である事自体が普通ではない!?!

「お前は一体なんなんだ!?!」

俺はふらつきながらも立ち上がり幼女に零刹那の切っ先を向ける。

「そういえば自己紹介がまだでしたね。私の名前は神位3位の次元神オーディン。気軽にオーちゃんって読んでくださいね。」

「次元神だと！？それにオーディン、まさかグングニールの。」

「いえまったく関係ないですよ。」

「ないのかよ！！」

「あ、でもロンギヌスならありますよ。」

「なぜお前がもっているんだよ！！」

「では続けて肉体の変換を始めますね。」

人の話を聞けよ！！そして肉体の変換って何！？

そう突っ込みを入れようとした俺であったが突如身体が激痛に襲われて声すら発する事ができなくなるとなる。

「ぐっ、が、あぐっ！？」

「身体の変換には激痛が伴いますが我慢してくださいね。」

そういう事は先に言ってもらいたいが、俺はまるで神経その物を剥ぎとられるかの様な痛みに耐える事しか出来ないでいた。

「痛みを耐えてあえぎ声をあげるシルバーハートちゃん何だかとてもそそる物が、よし最近買い直したばかりのハンディカメラで撮影を！！」

この激痛が収まったらこの幼女とりあえず殺す。

しばらくお待ちください。

ユウ?side

「身体の変換が終了しましたよ。どんな感じですか?」

「最悪だよ。身体が何か変な感じ。まるで自分の身体じゃないみたい。……………それに何これ身体が縮んでいる!?!。」

「一体何がどうなって!?!」

「それにしても可愛いすぎますよ。シルバーハートちゃん!?!いいえ今はシルバーシスターちゃんと言うべきですね。」

「シルバーシスター?何を言ってるの私はシルバーハートって私!?何で私!?!」

「どうして私は私なんて言ってるの!?!それに何この言葉使いまるで女の子!?!」

「だって貴女が言ったじゃないですか男の娘より女の子の方が好きだって。だからわざわざ身体を女の子にしたんですよ。」

「ま、まさか!?!」

私は自分の身体をぺたぺたと触って確かめてみる。

「お、女の子になっているだと……………!?!」

「はい、とっても可愛いですよ。基本的な見た目は変わっていませんがちゃんと胸もありますよ。えいっ!?!」

突如飛び付いてくる次元神。

「触るな、揉むな!!」

「大丈夫です!!女の子どうしなんですから。……………慎ましかで
すがこれはなかなか。」

「いい加減にしてー!!」

必死に身体をじたばたと動かすが次元神、いやもう幼女神を通して
行こう。幼女神を振りほどく事ができずにされるがままにされてし
まう。何をどうされているかはご想像にお任せします。

再度しばらくお待ちください。

「次元神オーディンとあろう者が取り乱してしまいましたね。」

「もうお嬢にいけない。」

「それなら私がもらいますよ。今は女の子だから正確にはお嫁さん
ですけどね。」

そんな事は知らないが……………。

「詳しく説明をしてもらおうか。」

「今崇高なる神々の間では妹ブーム。そして簡単に言わせてもらえ
ば今の貴女は女の子で女神候補生のシルバーシスターちゃんて私の

妹で嫁です。」

……余計に分からなくなっただけだ。

「最初のアンケートに答えてもらいましたよね。あれの通りに貴女
の能力及び肉体を変化させたのです。別世界に行ってもらおう為に。」

あれで……………。

「ちゃんと最初に説明してよ!!」

「だって説明したらアンケート受けてくれなかったですよ?」

「当たり前だよ。とりあえず早く元に戻して。」

「ごめんなさい。無理です!!っていかしたくないです!!」

直ぐ様頭を下げて詫びをいれる幼女神。だが顔が凄くニコニコして
いる。絶対に反省してないよねこの幼女。

「とりあえず今の貴女はシルバーハートちゃんの時程の力はないで
すからね。」

「そうなのかい。って違う!!何故だ何故戻せないの!!」

「だって戻すには最高神であるゼウスちゃんの許可がいるし。ゼ
ウスちゃん百合っ娘だから絶対に無理だもん。」

そんな風に言ったところで今の私にはウザイだけ。それよりゼウス
貴方は何なんの!?!もう私意味がわからない!!

「そつだ貴女はに紹介したい娘がいるんだファイブスちゃん出番だよー。」

幼女神が巫女服の懐から一枚のディスクらしき物を取り出すと地面に叩きつけるかの如く投げつける。てつきりディスクは粉々になるかと思われたが突如発光する。そして光が止むと光の中から一人の女の子が現れる。赤紫のストレートの髪を持ち、瞳は青く輝き明確なる強い意思を感じ取れる。

「彼女は人型ゲームキャラのファイブス・ディスクちゃん。貴女のパートナーになる娘だよ。」

「以後よろしくお願いしますマスター。それと私の事はファイと呼んでください」

幼女神の紹介を受けたファイブス・ディスクはまるで臣下の礼の様に膝を付く。良かった。どうやらある程度は普通の娘みたいだ。イストワールらしき者だったらどうしようかと思った。

「私の事はマスターなんて呼ばなくていいよファイブスさん。」

マスターとか堅苦しいのは嫌だからね。

「わかりました。舌を噛みきります。」

この世界に神はいない。……いや一応目の前にいるのか。

「どうしてそうなるの!？」

「マスターをマスターと呼べなくなるくらいなら、そしてファイと呼んでくだらないのなら舌を噛みきります。」
「やっぱり普通じゃなかった。」

「それではマスター舌を出してください。噛みきりますので。」

「私のを噛みきるの!?!」

「だって私痛いの嫌ですし、そしてどさくさに紛れてベロチューしようかと……………」

「よろしくねファイ。気軽にマスターって呼んでね?」

「しかたありませんマスターの頼みならそつしましょう。」
怒こつたらきつと負けなんだろう。

「ところでゲームキャラって何?」

私はファイに問いかける。

「何なんですか?」

ファイは幼女神に問いかける?

「何なのかなあ？」

幼女神は俺に問いかける。

「さあ？つて二人が知らない事を私が知る訳がないでしょう！？」
こいつ等私をからかっているのか！？」

「マスターって弄りがいがありますね。」

「ファイブスちゃんに本人の前では言ったら駄目だよ。確かに弄りがいがありますけど。」

「落ち着け私、怒ったら負けだ。クール、クール。」

怒ったらこういう奴等は付け上がるに決まっている。

「結局ゲームキャラって何？」

「……………」

本当に知らないのかよ！！

「とりあえず話もまとまったところで別世界に送るね？」

「何処がどう纏まったの？」

「マスターそこは空気読まないとKYKKKって言われますよ。」

Kが明らかに多い気がする。

「因みに意味はK・空気Y・読めないK・けれどもK・可愛いよ、という事です。」

「……………突っ込むだけ無駄みたいだね。」

何かを悟った気がする。

「次元神の中でも優しいおーちゃんが簡潔に纏めましょう。シルバーハートちゃんは別世界への移送をかけたアンケートを私に騙されて無理矢理やらされて、アンケートの解答結果によって力の殆どを奪われてシルバーシスターちゃんに劣化しちゃったわけです。そして今まさに別世界へと新たな相棒であるファイブスちゃんと共に旅立つ事になりました。」

それで上手くまとめたつもりか？

「まあいい。この姿で元の世界に戻ればどんな恐ろしい目に合うか予想はつく、ならばいっそのこと別世界で別の人物として生きるのも悪くないかもしれないね。寧ろこの世界から開放されたい。」

「開き直りましたねマスター。」

「別に開き直ったわけではないよ。それとシーちゃん言うな。まあ別世界に行くのは構わないんだけど一つ問題があるんだけど……………」

「問題？何かな？」

「ああマスターと一心同体の私にはわかりますよ。……………エツチな事ですね。」

「ふ、ふええっ!?!」

「違うよ!!断じて違うからね!!」

「分かってますよ。単なるジョークですよ。」

「な、何だ期待して損したよ。それで問題って何なの?」

「……………妹達だ。」

「「ああ、あの変態女神達。」」

何故そこでハモる、そして何故知っている。

「……………私が居なくなったら確実にあいつら+ が世界を崩壊させかねない。」

「それなら大丈夫ですよ。私が何とかします。」

「何とかするってお前がか?無理だろう。」

「いえ、大丈夫だと思いますよ。このクソ幼女見た目これですけど全盛期のマスターの三倍強いですよ。」

「これがか？」

「キラッ」

「ええこれですよ。」

「キャハッ っていた!？」

「「黙りなさい。」」

とりあえず頭を殴っておいた。

「ごめんなさい。でも私本当に強いんですよ。えいつ!?!」

何故抱き付く。……………つて。

「痛い、ちょ、洒落にならないくらい痛い!!腰がくだけるから!!お前の強さはわかっただから離れて!!」

「えへへシーちゃん良い匂いー。」

駄目だこの幼女神早く何とかしないと。

「ファイ何とかして！」

「……………え？」

そこで何故私に頼むんですか？って本当に不思議な顔しないでくれませんかー！

「むぎゅー！！」

『ゴキーンッ』

やばい何か砕けた。

再再度お待ちください。

「それでは初回特典としてユウちゃんの服をチェンジー！！」

「意外とまともなのか？スカートはいただけないけど。とりあえず初回特典って何？」

私の服装は「ユーちゃんですよ。」

「いやそれはそうだけど。」

「違うよユウちゃんはユウちゃん。そしてその姿はユーちゃんのコスプレ。だけど性能はピカ1だよ。」

今の服装は服の上から腕にガントレットとプレートアーマーを装着するという奇抜なファッション。そして自分がミニスカートを穿く事に戸惑いを隠せないでいた。

「あれはゾンビですか？」

「いいえ女神候補生です。」

「こいつら何なんだろう？」

「無論ネクロマンサーの力も付属するよ。死んでから一時間以内の人なら復活可能だからね。」

「理解が追いつかないよ。」

「考えるな。感じるですよマスター。」
それは何か違う気がするよ

「それでは今から別世界へ移送しますからね。」

「随分と唐突。そしてここまで来るのに一体何ページかかったことか。」

「マスター、メタ発言は駄目ですよ。」言わなきゃやってられないよ。

ところでメタ発言ってどういう意味だろうか？

「もう！無視しないでよー。」

「……ウザすぎる。」

ピョンピョン跳ねるな本当に血管が切れそうだ。

「シーちゃん、とりあえず何かあったら直ぐにお姉ちゃんに連絡するんだよ。」

誰がお姉ちゃんだ。

「それとはいこれ友達から死ぬまで借りてきた夜笠。」

幼女神から渡されたのは黒いコート。夜笠って友達に炎 灼眼の
ち手でもいるのか!?

「因みに、名前はシャ たん。」

そっちか!?

「中にいっぱいお助けアイテム入れてあるからね。」

投げ捨てたら駄目だろうか？

「捨てたら発情するからね。」

こいついずれ殺す。

「それでは良き旅をー。落とし穴オープン!!」

「しまったー！怒りに捕らわれて、ってまじで落とし穴ー!!」

「マスターこれが所謂お約束ってやつですね。私また一つ学習しました。」そんな事学習しなくていい。

幼女神によって落とし穴に落とされた私はどうやらこのまま別世界へと行ってしまつようである。

そっいえば…………。

「私って何の世界にいくのかな？」

「……………さあ？」

とりあえず前途多難の様である。

神位第三位の次元神オーデインによって別世界へと飛ばされたシルバースター。辿り着いた場所は世界の墓場。そこで出会うのは一人の女神候補生。

次回 男の娘だった女神候補生

第1話 通りすがりの女神候補生。

全てを破壊し全てを繋げ。

ブローグ 『幼女には最早危機感しか感じ得ない』 (後書き)

現在のユウの状態

身体能力 足の速さ以外は全て劣化

魔力等も全て劣化

使用できる魔法も低級の物のみ。

見た目も幼くなっている。

主人公及びオリキャラの紹介（前書き）

題名の通りです。追加予定あり。

主人公及びオリキャラの紹介

・ユー

性別 男の娘だった女の子

CV(妄想) 月宮みどり

身長 146cm

体重 38kg

B 慎ましかWとりあえず細いHご想像にお任せします。

見た目はこれはゾンビですかのユークリウッド・ヘルサイズそのもの。ただし髪の色は白で長さは腰に届く位。瞳は青い。

服装もこれはゾンビですかのユークリウッド・ヘルサイズその物。ガントレットやプレートアーマーも標準装備。その上からさらにオーデインよりもらった夜笠を羽織っている。ミニスカートの下にはスパッツ着用。

使用武器 菊雫紋字(菊雫紋字は液体金属で出来ていてその形状を斬艦刀に変える事が可能。その際の名は斬艦刀・菊。)、零刹那という双剣。色は二つ共に銀色。二つの剣を連結して大太刀として使うこともできる。(本来は真打童子切安綱という妖刀であった。だがオーデインによって童子切り本来の力は失われている。

)

・マジエコンヌを倒して平和になった無印のゲームギョウ界より超次元ゲームネプテューヌmk2のゲームギョウ界に次元神オーディンよって送り込まれた。オーディンよって性別が強制的に女の子に変えられた。

見た目も少し幼くなっている。呼び出された場所であるギョウカイ墓場でネプギアに出会う。丁度その時ネプギアとジャッジ・ザ・ハードの闘いの真っ最中でそこに介入して通りすがりの女神候補生のシルバーシスターと名乗ってしまった、以後その名を貫く。面倒事に巻き込まれやすい性質になっているのは変わらず。そして何故か軽度の方向音痴になっている。炊事洗濯などが得意などの家庭的な面もある。お菓子なんかを作って食べるのが好きだがネプギア達によく強奪され食べられてしまう。

お化け等のホラー系が苦手。最初からレベルが高めでネプギアを助ける為にギョウカイ墓場で闘った際はジャッジ・ザ・ハードと相討ちではあったが互角に渡り合う。双剣を使い手数で攻める。その為APがかなり高め。だが攻撃力は低め。スピードはアイエフを凌駕する。

・女神候補生 シルバーシスター

髪の毛は白から銀色に変わる。瞳の色は青から金色へと変わる。何故かクーデレっぽくなる。

プロセスサユニット ・シルバmk2

ユウが以前使っていたプロセスサユニットの劣化版。名前にはmk2とあるが性能は以前のゲームギョウ界で使っていたものより性能は落ちる。だがネプギア達のプロセスサユニットと同等の性能を持つ。見た目はユニが使用するプロセスサユニットクレイドルの色違いで銀色。そして胸の部分に変身前のプレートアーマーを腕にはとガントレットを装備している。レオタード状ではなくスパッツ状。

そして何故か夜笠を羽織る。
スキル

・見よう見まね燕返し

某アニメの佐々木さんの燕返しをその名の通りに見よう見まねでや
つたらできた技。一度の剣撃で三度の斬撃を放つ。

騎乗スキル『S』

その名の通りにありとあらゆる乗り物を操る事ができる。モンス
ターでも。

方向音痴スキル『D』

その名の通り経度の方向音痴起こすスキル。現在は軽度だが発展す
る可能性もあるとの事。

ねくろまんさー

死んでから一時間以内の生物をゾンビとして蘇らせる能力。

ファイ

妄想CV 広橋涼

正式名称ファイブス・ディスク

見た目はデモンベインに出てくるエセルトレーダ。服装も同様に。

オーデインよりユウに託された人型のゲームキャラ。ユウの事をマスターと呼び慕う。

だがユウをからかってその反応を楽しむのが趣味。マスターであるユウと自分の事以外は気にも止めていない。何故か教祖イストワールとは仲が良い。ユウの作ったお菓子や料理を食べる事が好きでそれ以外はたべない。

戦闘では常にユウのサポートに徹して他の誰にもユウとのカップリングを許さない。炎系統の魔法を使用する。

ユウのサポートを行う事によってユウの低い攻撃力と防御力をあげる。魔法によってユウの剣に炎を宿す事もできる。単体で戦闘を行う事も可能。典型的な遠距離魔法タイプ。接近戦は大の苦手。ユウの頼れるパートナー。

スキル

・ふぁいあ

対象にに向かって炎をぶつける低級魔法。

・ふぁいあすとーむ

対象を炎の渦に閉じ込める中級魔法。

・ぎがんとふぁいあ

対象を最大出力の炎で焼き付くす。

ふぁいの加護

ユウ限定

ユウの剣に炎を宿らせる攻撃力をあげる。ユウ以外の人物に使うとスキルを封じる。

ふぁいの癒し

ユウ限定

ユウの傷を癒す。それ以外の人物に使うとダメージを与える。

神位第三位 次元神オーデイン

愛称 おーちゃん

妄想CV 新名彩乃

見た目は11eyesのリゼット・ヴェルトルを少し幼くした感じ。

服装は博 神社の巫女服。

ユウを騙してシルバーシスターに劣化させて別世界のゲームギョウ界に送りこんだ張本人。

その実力はシルバーハートだった頃のユウの三倍だそうだ。 自称ユウの大ファンで涼しい顔してセクハラ紛いの事をする（ユウのみ）。

次元と次元を行き来する力を持っている。

神位第一位 ザ・ゼウス

妄想C V 新名彩乃

見た目は11eyesのリーゼロッテ・ヴェルクマイスター。

神位第三位のオーデインとは双子の姉妹でゼウスが姉。

彼女もまた自称ユウの大ファン。

実はユウを性転換させて別世界へ送るのを考えたのは彼女である。その理由はゼウスは超百合っ娘であり初めてユウを見た時ユウこそが自分の運命の相手であると考えたが男の娘である事実を知ってしまい、絶望してしまふ。だが彼女は考えた男の娘なら女の子にしてしまえばいいと。

見た目や言動とはちがい中身は純情な女の子。よくオーデインに卑猥な事を言われたりすると鼻から愛を吹き出して失神するほど。

実力は未知数。

主人公及びオリキャラの紹介（後書き）

うーむ。解りづらいかもしれない。何か質問があったらご自由にお願いします。

第一話『通りすがりの女神候補生』（前書き）

ストックを全て投稿する勢いで行ってみようかと。

第一話『通りすがりの女神候補生』

ユウside

幼女神によつて別世界へと飛ばされた私はとりあえず現実逃避をしていました。

「きつとこれは夢に違いない。目が覚めたら元の世界にいるに違いない。」

「マスター紛いもなくこれは現実ですよ。そして今のマスターは女の子、しかもかなりの美少女。」

「……………お願いだからそれを言わないで。」

「別に元々女の子みたいな顔をしているんだからいいじゃないですか。」

「よくないから!!……………なんとかして男に戻らなくては。」

「無理だと思いますが。」

「それはどういう事だ?」

「マスターの性別を変えたのはあの幼女神です。元に戻すにはあの幼女神に再び会わなくては行けませんよ。」

「……………あれにか。」

「会いたいですか?」

「遠慮しておくよ。」

「それが懸命です。」

「まあきつとそのうち何とかなるだろう。とりあえず今自分の置かれている現状を把握しておこう。」

私は辺りを見渡してみる。

「何やら空は赤い。そして辺りにはゴミらしき物がいっぱいあるけど。……ここはどこだー！！やばいよ自分の置かれている状況すら把握出来ていないよ私！どうしようファイ。」

「困っているマスターも可愛いです。そしてそんなマスターに私は幼女神に渡された夜笠を調べるべきとお知らせします。」

「夜笠、確かあの幼女神が中にお助けアイテムが入っていると聞いていたな。どれどれ。」

私は夜笠の中に手を入れて中を探る。

「……………何か掴んだ。」

「マスターそのまま引っ張って！！引っ張って！！」

「よしこの現状を把握する事ができるお助けアイテム出てこーい！！」

私は掴んだアイテムを力いっぱい引き抜く。

「これは本？」

私を取り出したアイテムは赤い本であった。表紙には『神位第三位オーデインの全て（初心者編）』とツツコミどころ満載の本であった。

「あいつは何がしたかったの？」

「脚本家（幼女神）の悪意を感じますね。とりあえず燃やしましょうか？」

「そうだね、嫌な予感しかしないけど。はいどうぞ。」

私はファイに本を渡す。

「ぼおおお。」

「うわあ！？口から火が出た！？」

これ忘年会の隠し芸で使えるかもしれない。ファイが口から炎を出して本を燃やすのを見つめながら私はそんな事を考えていた。

「カツコイイでしょう？」

隠し芸で使えるかもと考えていた事は言えない。

「あ、うん。そうだね。それにしてもここは一体どこなんだろうね？この夜笠は使い物にならないし、打つ手なしかな？」

「ああもう困ったマスター萌え萌えです。しかたありません私は優しいですから教えてあげます。ここはギョウ界墓場です。」

「ギョウ界墓場？ギョウ界墓場って何？ファイは何か知ってるの？」
「尺取り虫以下の使い道のない雑種が行き着く墓場です。まあマスターと私には縁も所縁もない場所ですよ。」

「さらに分からなくなつたよ。」

「何ですか、もー。」

それはこちらの台詞なのなのだが……………。

「ギョウ界墓場それはゲームギョウ界で死んだ者達が辿り着く場所ですよ。」

「……………ちょっと待って！！今ゲームギョウ界って言わなかった！？」

「言いましたけどそれが何か？」

「私って別世界に行ったんじゃないの！？」

「もしかしてマスター知りませんでしたか？ここはマスターがいたゲームギョウ界とは少し違うゲームギョウ界。簡単に言えば並行世界とも言えますね。スパツツな女神とか魔法少女な女神とかいませんからね。」

いたら私の精神は擦りきれているだろうね。

「ところで私はこの世界でどうすればいいのファイ？」

「私に聞かれても困ります。聞くならあの変態（幼女神）に聞いてください。」

「……………とりあえず辺りを歩いてみようか？」

「無視ですか？スルーですか？現実逃避ですか？だけど私は優しいですから許します。マスター歩くなら手を繋いでください。」

「はいはい。ありがとうファイ。」

アイの手を私は優しく包む様に握る。ファイも同じように握り返してくれる。手を繋ぐっていうのも改めてするとなんだか恥ずかしいな。

「あ、マスター今私の手の暖かさにドキッとしませんでしたか？」

「……………少しだけ。」

「マスターって結構顔に出ますね。」

出てるの！？つつい顔に触って確認をしてみよう。

「本当にマスターは可愛いですね。」

ユウ&ファイ散策中

「それにしても空は真っ赤、辺りは何やらジャンクっぽい物だらけ衛生面はあまりよろしくなさそうだね。」

「そこは気にするところではないと思いますが……………」。

「いやいや結構重要だよ衛生面。……………それにしても一体私はどうなってしまうのでしょうか？」

「一つ言える事は私は何があってもマスターの味方です。例え世界の全てが幼女になっても私はマスターの味方です。」

「世界の全てが幼女にはならないと思うけど一応ありが……………!？」

ファイにお礼を言おうとしたその時だった。地面が軽く揺れる程の衝撃が辺りを襲う。

「今の衝撃は……………」。

「結構近いですね。さほどここから遠くはないですね。」

「金属がぶつかり合う音。たぶん誰かが戦っているんだろうね。」

「行くんですか？」

「まあね。もしかしたら誰かがいるかもしれないだろし、うまく行けば話しを聞けるかもしれないからね。」

「……………マスターに友好的な人がいるとは限りませんよ。もしかしたらマスターに危害を加える人達がいるかもしれない。それでも行くんですか？」

「ならここをずっとさまよっているとしても言うのか？私は何もしないでいれる程我慢強くないからね。もし大変な事になった時は「私」が助けますよ。」……………それなら問題ないね。」

「まったくマスターには苦労させられますね。先が思いやられますね。とりあえず危険になったら無理矢理にでもお持ち帰りしますからね。」

「お持ち帰りはしなくていいけど頼りさせてもらうよファイ。」

「なんだかんだ言うてくるけどファイも頼りになるね。どこかの史書とは大違いだよ。」

「了解しました。……………確実にマスターの中で私への高感度はうなぎ登りでしょうね。計画通りです。」

「何か言った？」

「いいえ、何も言っていないですよ。さっさといきましょ。」

ユウ&ファイ移動中

戦闘が行われているであろう場所へと向かっていた私とファイであったが着いた場所では恐るべき光景が繰り広げられていた。

「巨人と女の子が戦っている？」

「マスターこれは凄い所にでくわしましたね。あの黒くてでかいのはギョウ界墓場に封印されていた巨神兵であの白くて破廉恥な恰好をしているゴミ虫は巨神兵を鎮める巫女なんですよ。」

「そ、そうなの!？」

「勿論嘘ですよ。あのデカイのは知りませんが白いゴミ虫は確かプラネテューヌの女神候補生だったと思います。もしくはゴミ虫。」

ファイはあの女神候補生さんに何か恨みでもあるのでしょうか？

「マスター見ているだけでいいんですか？何か凄い事になっていきますよ。」

「……………え？」

私はファイに言われて闘いを繰り広げている二人を見る。

「MPBLオーバードライブ!!」

最近の女神もといこの世界の女神候補生はあんな凄い武器を使っているのか。なんだオーバードライブって？車でも運転するのであるうか？

「どのような愉快な事を考えているのかは知りませんが早く黒いのに加勢しましょう?」

「いやいや加勢するならあの女神候補生の娘に加勢しようよ。」

「駄目ですよ。マスターは攻略する側ではなく攻略される側何です

からね。全てのフラグは私が立てる予定ですが。」

ファイが言っている事のほとんどが私には理解出来なかったのだけれどこれは私が悪いのであろうか？

「よし！！良いですよ黒いの。そのままあの白いゴミ虫を潰すんです！！」

「って！？まずい！！」

ファイの声に思考の渦より呼び戻された私の目に入って来たのはプラネテューヌの女神候補生が今まさに黒い巨人の戦斧によって断罪される場所であった。そしてそれを見た私は反射的に夜傘を羽織り夜笠の中に収納してあった零刹那と菊壺紋字を取り出して黒いのとプラネテューヌの女神候補生の間に割り込む事が出来る場所へ向かって全速力で駆ける。

「マスター足早すぎでしょう！！50m何秒ですか！？」

確かに性転換させられてから身体は軽くなったのだが、突っ込むべき場所はそこではないと思う。

ネプギア side

プラネテューヌの女神候補生のパープルシスターである私ネプギアの心は恐怖と絶望に包まれていました。

「弱い。弱い者との闘いはつまらん！！弱い者は死ね！！」

私、死ぬんだあの斧で切り裂かれて死んじゃうんだ。
いや、死にたくない。死にたくない、
また負けちゃう。

「ネプギアー!!」

「ギアちゃん!!」

アイエフさんとコンパさんの叫び声が聞こえて来ます。だけどわたしの身体は恐怖に支配されて身動き一つ動かす事ができません。死にたくないよ。負けたくないよ。
いや、いや、いや。

「いやああああ!!」

そして私の身体は真っ二つに切り裂かれ……………。

「させない!!」

「……………え?」

私の身体は切り裂かれる事はなく私の命を刈り取る筈だった斧は白くて長い髪を持ったまるでお人形さんの様に肌の白い女の子が銀色に輝く二振りの剣を左右の手に持ち交差させて受け止めていました。

「せええええい!!」

「何だと!?!」

そのまま白い女の子は斧を切り払います。凄いあの娘強い。きっと私なんかよりも強い。それにとっても……………。

「綺麗。……………貴女は？」

「貴様何だ？」

偶然にも私とあのジャッジ・ザ・ハードの問いが重なる。

「……………行きますプロセスユニット装着。」

その言葉と共に女の子の身体が光りに包まれます。

これってもしかして私と同じ……………。そして光が止み少女が姿を現します。

「なるほど貴様もそうかその小娘と同じか。」

「私の名前はシルバーシスター。通りすがりの女神候補生。記憶しておきなさい。」

銀色の……………私と同じ女神候補生。

ギョウ界墓場でユウは再び剣を握る。だがそれはユウの昔との別れを、決別を意味するのであった。

次回超次元ゲーム Neptune mk2
男の娘だった女神候補生

第二話 『この世界に来てから良い事が一つもない』

目覚めるその魂。

第一話『通りすがりの女神候補生』（後書き）

ユーちゃんのお部屋

ユー「こんにちわ。司会進行を務めさせていただきますユーです。」

ファイ「どうも皆さん毒舌アシスタントのファイです。いえーい。」

ユー「じ、自分で毒舌って…。と、とりあえずこのコーナー初のゲストは。」

おー「どうもー！神位第三位の次元神オーディン事おーちゃんだよー！…！」

ファイ「なんで初ゲストがこれなんですか？」

ユー「さあ？」

おー「細かい事は気にしないで行こうよ。はいお土産の黒棒だよ。」

ファイ「意外と美味しいですね。」

ユー「かりかり。」

おー「今回は私達神々について説明だよ。」

ファイ「神と言えばマスターも神なのではなかったのですか？」

おー「そうだけど違うんだよ。ユーちゃんはゲームギョウ界の神だけど私は全ての次元、全ての世界を管理する神なのだよ！」

ユー「なるほどー。ってそろそろ時間だね。」

ファイ「悲しいですけどお別れの時間ですよ（にやにや）。」

おー「全然悲しそужじゃないね。まあ、いいやきつと出番がある事を信じて今日は帰るね。バイニー。」

ユー「バイニー。」

ファイ「バイニー。では次回もお楽しみにー。」

第二話『ここに来てから良い事が一つもない』（前書き）

何やらくだくだを超えたガタガタが出来てしまいました。読む場合はご覚悟を。

第二話『ここに来てから良い事が一つもない』

ユウside

「私の名前はシルバーシスター。通りすがりの女神候補生。記憶しておきなさい。」

我ながら何だかカッコイイのではないかと思う。

「どちらかと言うと可愛いですよ。」

どうせ今の私はかつての威厳なんて欠片もないですよーだ。

「何でもいからファイはこの娘を連れて下がって。」

「お断りします!」

「いやいや空気を読んでもらえるとありがたいのですが?」

「貴女一人であれの相手をするつもりですか?だとしたら無謀としか言えません?」

「……………本音は?」

「どうして私がこんなクソ虫を助けなくてはいけないのですか?」
素直ですね!!

「まあファイの気持ちも分からないでもないけどね。……………でも私を誰だか忘れたわけじゃないでしょファイブス・ディスク?こんな奴相手に負けるとでも思っているの?」

少し凄みを効かせてみる。

「……………わかりました。危険になったら必ず下がってください。今の貴女は全てにおいて劣化しているんですからそこは忘れないようにしてくださいね。」

何故か軽くため息をつくファイ。

「わかった。だから「何時まで俺を待たせる！？早く闘え！！」……………」

人の話を邪魔するとはこの黒いのも空気読めないリストに登録決定だな。

「焦らないで。貴方の相手はしてあげるよ。

だが名乗り返すぐらいしたらどうか？そのような事がわからない程低脳ではないよね？」

「貴様言わせておけば！！いいだろう俺の名はジャツジ・ザ・ハード。さあ闘えそして俺の渴きを癒せ！！」

「ザ・ハード、ある意味因縁かもね。先手は取らせてもらっよ！！」

ジャツジ・ザ・ハードその名に因縁を感じながらも私は零刹那と菊言紋字で斬りかかる。

あれに攻撃させる暇など与えず唯一上がったスピードで翻弄してみせる。

ネプギア side

「……………凄い。」

私の目の前ではシルバーシスターと名乗った少女が圧倒的なスピードで私ではまったくかなわなかったジャッジ・ザ・ハードを相手に善戦、うっん圧倒しています。あの娘は強いきつとお姉ちゃんと守護女神と同じ位に。

「……………本当に綺麗。」

剣を振るう度になびく銀色の髪。強い意思を宿した金色の瞳。抱き締めたら壊れてしまいそうな華奢な身体。

あの少女の姿を見ているだけで私の身体が心が熱を持つ。何故かわからない。だけでもしもあの娘の隣で一緒に闘えたらどうだろう。あの娘の背中を守りながら闘えたら。そして勝利の喜びを分かち合えたのなら。初めて会った相手だというのに、まだ会話すらまともにしたことがない女の子に私はそんな想いを抱いていた。

「そのクソ虫！何をそんなところでポケットとしているんですか！
？ここにいたらマスターの邪魔です。」

誰かが話しかけてくる。聞いたことのない声、誰だろう？今は邪魔をしないでほしい。シルバーシスターちゃんの事をもっと見ないと、しらないといけないのだから。

「マスターに見とれるのは分かりますがマスターを貴女みたいなクソ虫の視線で汚さないでください。ほら早く逃げなさい。じゃないと焼きますよ！！」

マスター？もしかしてシルバーシスターちゃんの事なのかもしれない。私に話しかけてくる娘はシルバーシスターちゃんの何なのだろうか？もし何か知っているのならいろいろと聞き出さないと。

「ネプギアー！！」

「ギアちゃん！！」

この声はコンパさんとアイエフさん。私は振り返ることもせずシルバーシスターちゃんの闘いを見ながら声だけで判断する。

「貴女達このクソ虫の知り合いですか？そうなのだとしたら早く連れて帰ってくれないか？はっきり言って邪魔なんですよ！」

「何なのよあんた！？それにあの娘見たところ女神候補生みたいだけどシルバーシスターってこの女神候補生よ！？私は聞いた事も見たことないわよ！」

「私もないです。」

人の横で大声で話さないでほしいシルバーシスターちゃんの息づかいが闘いの中ではなく荒い吐息が聞こえなくなってしまふ。

「話は後です。この状況でまともな会話ができるとも思っているんですか！？」「まあそれもそうね。」

「待つですアイちゃん今ならこのシェアクリスタルで女神様達を助けるチャンスです！！」

「なるほどコンパにしては名案ね！」

「えっへんです!」

「人のマスターを囚にするつもりですか。まあマスターの事だから気にはしないと思いますが。やるなら早くしてください。」

会話の内容は殆ど耳に入って来なかったけど、『シエアクリスタル』その言葉だけが私の頭の中に響いた。もしかしたらシエアクリスタルを使えばシルバーシスターちゃんを助けられるかもしれない。そうと決まれば私のとるべき行動は決まっていた。

「コンパさんそれを貸してください!!」

「ギ、ギアちゃんシエアクリスタルをどうするですか!？」

「ネプギアちよつと何するつもりよー!？」

「そのクソ虫貴女今行ったら!？」

私は三人の制止する声を無視してコンパさんの手からシエアクリスタルを取ってそのまま戦闘を行なっているシルバーシスターちゃんの元へと駆けよって行った。

「これがあればきつとあの娘を助けられる。」

ユウside

今出せる限界のスピード、そして手数で攻める剣。つまり……………。

「ずっと私のターンです!」

「良いぞ!良いぞ!!もつと俺の渴きを癒してみせる小娘!」

ひたすら私の攻撃を超重量武器である戦斧で捌くジャツジ・ザ・ハード。いくつかはその巨体にいれたはずなんだけど痛がるどころか逆に喜んでいるんだけど。ジャツジ・ザ・ハードまじでジャツジ・ザ・ハードだよ。女の子になったせいで筋力まで下がってるから結構きついんだよね。

「どちらにしてもこのままじゃあじり貧だよね。」

「うおらっ!!」

「くっ!?!」

ジャツジの戦斧での薙ぎ払いをしゃがんで避ける。

「ちょこまかと。」

「ただでは転ばない!!」

しゃがんだまま左足を軸にして身体を回転させてその勢いでジャツジの左足辺りを切り裂く。

今のは確かな手ごたえ少しは喰らってくれとありがたいんだけど。

「良いぞ!!だがもつとだ!!」

「何っ!?!」

冗談でしょう弁慶だって泣くよ今の一撃は。

そして私の驚きを無視してジャツジ・ザ・ハードは戦斧を私に向かって振り降ろす。私はそれを紙一重で零刹那と菊吉紋字をクロスさせて防ぐ。だが衝撃が身体にかかりその状態で後ろに飛ばされる。

何とか零刹那を地面に突き刺して身体を止めます。

「紙一重で防いでこれ程だなんて。まずいかな先程の勢いが崩されたら。こうなると手段は一つしかないか。」

手の痺れを感じながらも私は零刹那と菊唄紋字を連結させる。無論妖刀にはならない。なるのは妖力を失ったただの大太刀。だけど今必要なのは大太刀のリーチの長さ。

「…次の一撃で勝負を決めてみせる。」

「何でもいい！もつとだもつと楽しませろ！！」

私は何故か女神化しても羽織っていた夜笠の中に大太刀の半分を隠して腰を落として居合いの構えをとる。

来なさいジャツジ・ザ・ハード。貴方が突っ込んで来た瞬間お前の身体は真っ二つ。……………だけど私の予想は外れた。

「面白いならば。」

ジャツジ・ザ・ハードはこちらへ攻撃する事はなく戦斧を振りあげたところで動きを止める。

「な!？」

「どうした攻撃しないのか？」

このジャツジ・ザ・ハードこちらがカウンター狙いの居合いを決めようとしているの分かっていて動きを止めやがりましたよ。

やはりジャツジ・ザ・ハードまじでジャツジ・ザ・ハード。バトル

ジャンキーならバトルジャンキーらしくひたすら暴れてくれればいいのに。

「下手には動けないかな。」

これが私達の間合い。先に一步踏み出した方が負ける。まさかの我慢比べ。

何かしらのイレギュラーがない限り私に敗北はないはず。

ネプギア side

シルバーシスターちゃんとジャツジ・ザ・ハードの動きが止まった！？

「今なら！！」

どうして動きが止まったかはわからないけれどこのシェアクリスタルでならあのジャツジ・ザ・ハードを倒すまではいかないかもしれないけど少し位はダメージを与えられるはず。

「きつとあの娘の助けになるはず。」

私の頭の中にはシルバーシスターちゃんが笑顔で私にお礼を言ってくれる姿がつかんでくる。

ネプギア妄想状態突入！！（これからネプギアのちよつと痛い妄想が始まります。）

『ジャツジ・ザ・ハードこれでも喰らいなさい！！』

ジャツジ・ザ・ハードにシエアクリスタルで攻撃する私。

『やあーらーれたー!!』

なす術なく倒されるジャツジ・ザ・ハード。

『かつこいい!!』

感動して私に敬愛の視線を向けるシルバーシスターちゃん。

『大丈夫!?!』

『ありがとう素敵なお姉さん!』

『す、素敵だなんて…。』

『お礼にお姉さんのしてほしい事何でもしてあげるね!』

妄想状態終了

「えへへ、なら一緒にお風呂に入ろうか?はっ!?!だめだめ私
つたら何考えてるの!?!」

でも何でだろう?シルバーシスターちゃんの笑顔を思い浮かべただ
けで鼓動が早くなる。

そんな時であった。動きを止めていたジャツジ・ザ・ハードが斧を
シルバーシスターちゃんに向かって振り降ろす。

だけどシルバーシスターちゃんは動かないで先ほどの同じ態勢
で動きを止めたままでした。私の頭の中には先ほどとはちがいシル
バーシスターちゃんが斧の餌食になってしまう。絶望的な姿が浮か

びます。

私は自分でも驚く位のスピードでシルバーシスターちゃんの元へと駆け寄ります。

「駄目ー!!」

ユウside

動けない、動いたら負け。とりあえずこの膠着状態が続いているうちにファイ達は上手く逃げ延びてくれればいいんだけど。

「どうした攻撃をしないのか？」

「する必要はない。しなくても貴方には勝てるよ。」

これくらいの挑発にのるとは思えないけれど。

「言わせておけば小娘エー!!」

「……………沸点低すぎだよ。」

ジャッジ・ザ・ハードは怒りに任せて鎌を振り降ろす。そこから私は勝利を確信する。居合いでのスピードを乗せた抜刀でまずはあいつの鎌による一閃を受け流す。そしてそのままあいつの身体を真っ二つ。これでいけるはずだ。そして私は再び大太刀に手をかける。

「私の勝ち。これで決める名付けて天駆竜「駄目ー!!」なっ!?!」

今まさに私が新たななる奥義を発現してジャッジ・ザ・ハードの身体を華麗に真っ二つにする瞬間に突如現れたプラネテューヌの女神候補生の少女が私達の間割り込む。

「待ってね今助けるから!!」

「ま、待つて危険すぎるよ！」

「大丈夫！このシエアクリスタルを使えば！！」

少女が何かを掲げる。あれは信仰の塊シエア？いつたいあれで何を！？

「シルバーシスターちゃんは私が守ります！！」

少女は手に持つクリスタルを掲げる。するとクリスタルより光が放たれる。その光にはシエアの暖かさが感じ取れた。そこからあのクリスタルには大量のシエアが凝縮されていた事がわかる。

「ぐあああああ！！」

そしてその光を浴びて苦しむジャッジ・ザ・ハード。

「やった！やったよシルバーシスターちゃん！！」

ジャッジ・ザ・ハードに背を向けてこちらを見る少女。その顔はまるで忠犬が褒められるのを待っているかのようだった。

確かにあのクリスタルはジャッジ・ザ・ハードに効果的なようだ。

上手く使えばかなりのダメージを与えられるはずだ。ただ今は

………最善の一手ではなかったみたいだ。もしくは詰めが甘かったみたい。ジャッジ・ザ・ハードはまだ生きている事を彼女は忘れて
いるみたいであった…。

「ぐあああああよくも勝負の邪魔をー！！」

ジャツジ・ザ・ハードは目を抑えながらもむやみやたらにその戦斧を振り回す。そしてその戦斧は軌道から考えると女神候補生の少女の身体を真つ二つにするとところであった。

「くっ！？退いて！」

私は少女を突き飛ばすと戦斧切り払う。だがそれでも戦斧による攻撃は止むことなく私を襲う。

「くっ、はあ！！」

このままではいずれ押しきられてしまう。……………どうすればいいのやら。

私がジャツジ・ザ・ハードの攻撃を捌きながら次なる手だてを考えている時であった。

「炎よあらゆる敵を止める渦となれふあいあすとーむ！！」

いつの間にもこちらに来ていたファイが放った魔法によって炎の渦に閉じ込められるジャツジ・ザ・ハード。

「マスター今が好機です。この炎も長くはもちません。」

「助かったよファイ！よし、奥義見よう見まね燕返し！って上手くいったよ……。」

大太刀を上段に構えた私はとあるアニメの剣士の技を見よう見まねで放つ。意外と上手くいくもんだね。まあある程度は劣化しているんだろうけど。燕返しは一度に三つの斬撃を放つ奥義なんだけどシルバーハートの時はスピード、身軽さが足りなかったから出来なかった。けど使用出来たのは女の子になって身軽くなったおかげであ

ろう。まさか性別が変わってメリットがあるなんてね。そして放たれた三つの斬撃はジャッジ・ザ・ハードの右腕を斬り落とす。

「ぐっ！？ぐっおおおおお！！」

「……………凄い。」

「お見事ですマスター。さすが私の嫁です。」

「とりあえず早く撤退を。……………なっ！？」

撤退を提示する私だったけど振り返りプラネテューヌの女神候補生の少女の方向を見た瞬間全速力で駆け出す。

なぜなら斬り裂かれたジャッジ・ザ・ハードの腕から抜け落ちた戦斧が放物線を描いて落下しようとしているからである。……………そう、あのプラネテューヌの女神候補生の少女の元へと。きつとあの娘は何か憑かれているに違いない。

「はぐうっ！？ってやっぱり無理！！」

なんとか戦斧を切り払うが無駄に遠心力とかかっているせいもあって先ほどの戦闘で体力も気力も消費した私は不様にも仰向けに倒れる。その瞬間に女神化も解けてしまう。

だが今そんな事はどうでもいい。今重要なのはあの戦斧を切り払った時に『ガキン』と何かが折れたかのような音がしたことであった。私は恐る恐る手元の大太刀を見つめる。そこには連結が解除されていた零刹那があった。ただし根本からボッキリと折れていたけれど。ちなみに菊ヶ紋字は少し離れた所に突き刺さっていた。

「そ、そんな今まで一緒に闘ってきた相棒が……。」「
折れた刀身？そんなの私の右脇腹を浅く切って私の真横に突き刺さ
ってるよ。」

痛くないのかって？痛いよでも今は……。

「うつつ、ぐすつ。ひぐつ、うつつ。」

零刹那の折れた刀身を見ると何故か涙が止まらなくなっていました。
必死に折れた刀身と柄をくっ付けようとしたり感情的になっていた。
どうして私はこんなにも感情的になっているのだろうか？

「ま、マスター大丈夫です。出血は酷いですが命に別状はありません。
だから落ち着いてください。」

「怪我なんてどうでもいいからこれを直してよ。」

私は折れた零刹那をファイの前に突きだす。

「残念ながら私には無理です。」

「うつつ。……ここに來てから良い事が一つもないよ。」

そうやって私は立ち上がり零刹那と菊吉紋字を回収して夜笠の中に入
れる。

「それにしてもマスター随分肉体に精神が惹かれてきましたね。」

「……どういふ事？」

「マスターの身体が女の子になった上に幼くなってしまった為に精神年齢が肉体年齢惹かつつあるのです。詳しくは後書きで。」

「そんなメタ発言して大丈夫?」

「きっと皆さんスルーしてくれますよ。とりあえず傷の応急処置をしておきます。」

ファイの手が傷口に添えられてそこから暖かい光が出て傷を癒してくれる。

「ちよつと痛い。」

「

「我慢してください男の子でしょう?」

「今は女の子だけ。」

「認めましたね。………これでよし、マスター終わりました。直ぐ様ここから退きましよう。」

「でも退くと言っても何処に?」だ、大丈夫シルバーシスターちゃん!?!」あ、もしかしてさっきの女神候補生さん?」

私が軽く途方にくればいると先ほどの女神候補生の少女が 女神化が解けた状態で走り寄ってくる。

「だ、大丈夫? 怪我してたよね? 私軽い治療なら出来るから見せて!」

「あ、いや大丈夫だよ。出血も止まってるし傷も塞がっているから。」

「駄目だよ！下手したら傷口からバイ菌や雑菌が入って化膿して膿が溢れ出てさらには爛れて大変な事になっちゃうよ！！」

「だ、大丈夫だよ！ってちょっとスカートを引つ張らないで。」

この娘はこの状況を理解しているのだろうか？とりあえずこのようなどころで脱がせられる身にもなってもらいたい。

「だったら早く脱いで！！」

「調子に乗らないでください！！」

「へぶうつ！？」

スカートを何故か引き下ろされそうになっていたけどファイが助走を付けてからのドロップキックで彼女を蹴り跳ばしてくれたおかげで助かりましたよ。

「ファイ今のは？」

「ドロップキックですけれど何か？」

「いや、あの助けに来てくれてありがとう。」

「……………どういたしまして。」

やり方はあれだけど一応助けしてくれたのでお礼は言っておきました。

「うつつ、痛いよ。」

「だ、大丈夫？」

「あ、うんありがとつ。」

痛みに後頭部を押さえて膝をついていた少女に手を貸して引き上げる。そして何故か少女は顔を赤くしていました。大丈夫だよはじめでドロップキックを受けた人は皆そんな顔をするから。

「なにマスターの手を握ってるんですか。なに赤くなってるんですか。なにドキッとしてるんですか。調子にのるなよこのクソ虫。」

「ちょっとファイいきなり何言ってるの!？」

「……………シルバースターちゃんの手暖かい。」

「ちょ、きもすぎですこのクソ虫。それにマスターの手は暖かいに決まってるでしょう。しかも良い匂いまでするんですよ。」たぶん一言多いよファイ。それといつ私の手の匂いを嗅いだの? とりあえずこのコントを続けている二人に現実を直視させることとしましょう。

「二人ともとりあえず後ろを見てくれるかな?」

そこにこの空気を叩き壊してくれる現実ジャッジがあるから。

「うなじというのなかなかそそりますね。」

私の髪を捲りあげてほうほうと頷いてみつめるファイ。

「違うから！私のうなじじゃなくて私の背後少し離れたところを見て！！」

「「え？」」

「目がああああああ！腕がああああ！！おのれ貴様ら目が治ったら殺してくれるわああ！！」

残った片手で目を押さえて膝を付くジャツジ・ザ・ハード。手負いの筈なのに

その気迫は衰えていない。寧ろ先程より闘気も殺気も格段に増していました。よくこんなの相手にして私はまともに闘えたものだよ。

「何か面白いので写メを撮りましょう。パシヤリ。」

だがファイ達の前ではそんな緊迫した空気さえも簡単に霧散してしまふみたいだ。「あ、携帯持ってたんだ。っていい加減にしろー！！」

「うわぁマスターが怒ったー（棒読み）。」

「怒ったシルバーシスターちゃんも可愛いよ！！」

ファイを押し退けて発言をする女神候補生さん。

「はい！？君まで何言ってるの？」

駄目だ私ではこの二人を止める事はできないのか！？

「ちょ、ちょっと貴女達何やってるのよ！？早く逃げるわよ。」

「そうですね！シエアクリスタルも砕けちゃったです。」

あれ？今どこかで聞いた事のある声がしたような？

「そうですね。マスターあまりふざけてないで状況を見てください。」

「はい！？」

「そつだよ早くプラネテューヌに戻ってシルバーシスターちゃんの怪我の手当てをしなくちゃ！」

「え？何なの何か打ち合わせでもしてたの！？もしかして私仲間外れ！？」

「さすがですマスター予想通りのリアクション。ぐっじょぶです。」

「やっぱりからかっていたの！？」

「早く行こうシルバーシスターちゃん！」

「って痛い！引つ張らないでよ！」

女神候補生の少女によって物凄い力で引つ張られた私は痛みを感じながらもこの状況を打開する方法はないかと考える。

「そのクソ虫。マスターに気安く触れるとは良い度胸していますね。私の右腕が火を吹きますと言わせてもらいましょう。」

「はあ。本当にここに来てから良い事が一つもない。」

そして私はどこに連行されるのだろうか？

プラネテューヌの女神候補生ネプギアと出会ったユウはプラネテューヌの教祖を名乗る者に出会う。次回超次元ゲームネプテューヌm

k 2

男の娘だった女神候補生

第三話「プラネテューヌの教祖」

闘わなければ生き残れない。

テイル 風スキット

親近感

アイエフ「あのシルバーシスターって娘、私と同じ匂いがするわ。」

コンパ「同じ匂いですか？」

アイエフ「ええ俗に言うツツコミ苦勞人臭が。」

コンパ「……………アイちゃん。」

第二話『ここに来てから良い事が一つもない』（後書き）

ユーちゃんの部屋

ユー「こんにちは皆さん。二回目となりましたこのコーナー。司会のユーです。」

ファイ「いつも貴方の後ろで焼き殺す機会を伺っていますアシスタントのファイです。」

ユー「今回のゲストはこの方！」

ジャツジ「ジャツジ・ザ・ハードとは俺の事だ！」

ユー「ネプギアちゃんを期待した方は申し訳ありません。」

ファイ「あんなクソ虫どうでもいいじゃないですか。それにしてもジャツジ貴方腕はないですけど大丈夫なんですか？」

ジャツジ「既に新しい腕をマジックが制作中だ……。」

ユー「す、すいません。腕は痛くないわけではないですよね？」

ジャツジ「大丈夫だ……。だからそんな泣きそうな顔をするな。土産の俺のつけた漬物だ。これでも食えや。」

ファイ「これは……。ちよつとスタッフ！ご飯持ってきてください！」

ユー「凄く美味しいですよ！」

ジャツジ「気に入ったか？」

ユ一「はい！」

ファイ「とりあえず今回の本題に移りましょう。今回はマスターの肉体の変化による精神の変革についてです。本文のマスターは男の娘だった頃の記憶や認識のせいでもまだまだ完全に自分が女の子だと認めていません。ですが後書き、感想の時のマスターは肉体も精神も完璧な女の子になっている状態なのです。」

ユ一「なら本文のわたしが精神まで女の子になるのは…。」
ジャツジ「時間の問題か…。」

ファイ「そうですね。まあこれは仕方のない問題なので諦めてくださいね。とりあえずそのせいもあって作者のトマトはあえてユ一sideではなくユウsideにしているわけです。これもまた時間の問題ですが…。」

ユ一「とりあえずそろそろ時間なのでまた次回もお楽しみに。ジャツジさんありがとうございました。また来てくださいね。」

ジャツジ「気が向いたらな…。」

ファイ「スタッフ！ご飯御代わりを所望します。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5219z/>

超次元ゲームネプテューヌmk2 男の娘だった女神候補生

2011年12月19日00時49分発行